

介護経営術

vol.30

計算書類の 読み方のポイント

BSの見方

今回は、計算書類の基本的な読み方のポイントを紹介します。

BS (Balance Sheet: 貸借対照表) は施設の財政状態を表すもので、所有する総資産を表す「資産」の部分、借入金などの債務を表す「負債」と繰越利益などの自己財源を表す「純資産」の部分から構成されます。社会福祉法人では「純資産」に、設立時の寄附金や補助金も含まれます。

「負債」は借入金や未払金等、いずれ返済や支払いが必要なものですが、「純資産」は返済や支払いの必要がなく、利息もかからない自己財源です。よって、「純資産」の割合が高いほうが、財務的安全性が高いと考えられます。

図表1は、ほぼ同じ規模の2つの特養ホームA・Bの貸借対照表を簡略化したものです。規模は同じでも、固定資産(建物等)と固定負債(借入金等)の金額は、特養ホームBのほうが大きくなっています。

特養ホームAは開設後20年以上が経過し、借入金の返済や建物の減価償却費も進んだため、貸借対照表の額も小さくなっています。特養ホームBは開設後5年でまだ新しく、今後も借入金返済が毎年続くため、必要な利益を毎年確保できるように綿密な経営計画と実行が重要です。

反対に特養ホームAは借入金返済負担がなく、「資産」に対する「純資産」の割合が高いので、財務的な安定性が高いといえます。しかし、修繕や建替え資金の留保を考えるべき時期でもあります。

株式会社川原経営総合センター
経営コンサルティング部門
統括補佐



森田 敏史

また、貸借対照表から短期的な財務的安全性をみる指標には、「流動比率」があります。算出式は「 $\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}} \times 100 (\%)$ 」で、介護サービスの場合、約2カ月分の介護報酬が未収金として残るため、「流動比率」は300%以上になります。「流動比率」が低いと、短期的支払能力に不安があるといえます。

PLの見方

PL (Profit and Loss statement: 損益計算書・事業活動収支計算書) は、収益金額から費用額を差し引くことで、利益がいくら出たかを表します。

図表2はBS同様、2つの施設のPLを並べたものです。特養ホームAは本業から生じた利益を表す「サービス

図表1 貸借対照表(BS)の簡易事例

〈特養ホームA〉 (単位:千円)

| 勘定科目 | 金額 | 勘定科目 | 金額 |
|------|---------|----------|---------|
| 流動資産 | 72,434 | 流動負債 | 12,870 |
| | | 固定負債 | 8,562 |
| 固定資産 | 225,783 | 負債合計 | 21,432 |
| | | 純資産合計 | 276,785 |
| 資産合計 | 298,217 | 負債+純資産合計 | 298,217 |

〈特養Bホーム〉 (単位:千円)

| 勘定科目 | 金額 | 勘定科目 | 金額 |
|------|---------|----------|---------|
| 流動資産 | 84,032 | 流動負債 | 4,490 |
| | | 固定負債 | 232,100 |
| 固定資産 | 489,445 | 負債合計 | 236,590 |
| | | 純資産合計 | 336,887 |
| 資産合計 | 573,477 | 負債+純資産合計 | 573,477 |

図表2 損益計算書・事業活動収支計算書(PL)

(単位:千円) 〈特養ホームA〉 〈特養ホームB〉

| 勘定科目 | 金額 | 金額 |
|-------------|---------|---------|
| サービス活動収益 | 237,650 | 242,711 |
| サービス活動費用 | 239,133 | 226,650 |
| サービス活動増減差額 | -1,483 | 16,061 |
| サービス活動外増減差額 | 0 | -2,037 |
| 経常増減差額 | -1,483 | 14,024 |
| 特別増減差額 | 100 | -15 |
| 当期活動増減差額 | -1,383 | 14,009 |

図表3 キャッシュフロー計算書・資金収支計算書(CF)

(単位:千円) 〈特養ホームA〉 〈特養ホームB〉

| 勘定科目 | 金額 | 金額 |
|----------------------------|---------------|--------------------|
| 事業活動による収支 | | |
| 事業活動収入 | 231,043 | 237,110 |
| 事業活動支出 | 227,845 | 214,587 |
| 事業活動資金収支差額 | 3,198 | 22,523 |
| 施設整備等による収支 | | |
| 施設整備等収入 | 0 | 0 |
| 施設整備等支出 (内、設備資金借入金返済支出) | 1,785 (0) | 18,024 (15,000) |
| 施設整備等資金収支差額 | -1,785 | -18,024 |
| その他の活動による収支 | | |
| その他の活動収入 | 0 | 0 |
| その他の活動支出 | 0 | 0 |
| その他の活動資金収支差額 | 0 | 0 |
| 当期資金収支差額 | 1,413 | 4,499 |

活動増減差額」がマイナスであり、これは介護保険事業が赤字であることを示しています。

特養ホームBはおおむね順調な経営がなされ、本業の利益は約1600万円出ています。ただし、借入金に対する支払利息(約200万円)がサービス活動外費用に発生しているため、経常増減差額は約1400万円となりました。

PLを読むポイントとしては、まず本業の介護サービスの利益を「サービス活動増減差額」(一般企業でいう「営業利益」)で確認します。これが大きければ、本業の収益性が高いといえます。

次に、サービス提供に直接必要な取引ではないが毎年発生する支払利息などの「サービス活動外増減差額」を

加減した「経常増減差額」で、施設の総合的な収益性を確認します。

さらに一時的な損益である「特別増減差額」(固定資産の売却損益など、経常的には発生しない取引額)を加えて、1年間の経営成績を示す「当期活動増減差額」を計算します。

「サービス活動増減差額」「経常増減差額」「当期活動増減差額」の各項目を確認し、利益が出ていない場合には各勘定科目に視点を移して要因を探る、というように大枠をとらえてから詳細をチェックするのがコツです。

3年間ほどの傾向をみたり、他法人のPLと比較したりすることで、より経営に活用できます。

CFの見方

CF (Cash Flow: キャッシュフロー) 計算書・資金収支計算書は「どのような活動でいくら資金が増減したか」を表し、①「事業活動による収支」(本業において経常的に発生する収支)、②「施設整備等による収支」(固定資産の取得・売却等に関連する収支、設備資金借入金に関する収支)、③「その他の活動による収支」(運転資金の借入金の収支、資金の積立・取崩等)に区分されます。

図表3の特養ホームAでは、本業における収支差額(事業活動資金収支差額)が約300万円と小額ですが、借入金の返済などもないため、収支差額はプラスです。ただし将来の修繕や建替えの資金確保のため、本業の収支差額を上げる必要があります。

特養ホームBでは本業の収支差額を約2200万円計上できていますが、施設整備等支出の借入金返済1500万円の負担が収支差額を圧迫しています。借入金の返済を見越した収支差額を確保できる経営が必要です。

CFでは、本業の介護サービスによっていくら資金が増え、最終的に資金がいくら残ったかという資金の流れを把握しましょう。